

小田原市郷土文化館企画展 「100 年の記憶と記録—小田原の関東大震災—」開催記

田中里奈（小田原市文化財課）

1. はじめに

9 月 1 日は、陰暦でいう正月節（立春）から数えて「二百十日」にあたり、昔から台風が来ると言われていました。今から 100 年前の 1923（大正 12）年 9 月 1 日、この日の小田原は夜からの風雨が朝方には止み、午前 8 時頃には雲間から太陽の光が差ししていました。しかし、なんとなく「二百十日」を思わせるような、雲の多い鬱陶しい天気だったといえます。そんな不吉な予感が的中するかのように、午前 11 時 58 分、神奈川県西部を震源とするマグニチュード 7.9 の大正関東地震（以下、本稿では基本的に関東大震災、または震災と呼ぶ）が発生しました。

東京・神奈川・千葉・埼玉・静岡・山梨・群馬の 1 都 6 県という広い範囲で震度 6 以上の揺れを観測し、各地に甚大な被害をもたらしましたが、発生から 100 年が経過した現在では体験した人も減り、関東大震災は過去の災害のひとつとなりつつあります。

小田原市郷土文化館では、震災から 100 年を迎えた 2023（令和 5）年、未曾有の大震災を振り返り、改めて防災について考える企画展「100 年の記憶と記録—小田原の関東大震災—」を開催しました。企画展の開催にあたり、関係機関をはじめ多くの方にご協力いただき、また神奈川県温泉地学研究所にも、資料の借用や講座の講師として主任研究員の本多亮氏にご登壇いただくなどのご協力を賜りました。そのご縁で『神奈川県温泉地学研究所観測だより』への寄稿の機会をいただいたので、今回の企画展や関係資料について紹介したいと思います（写真 1）。

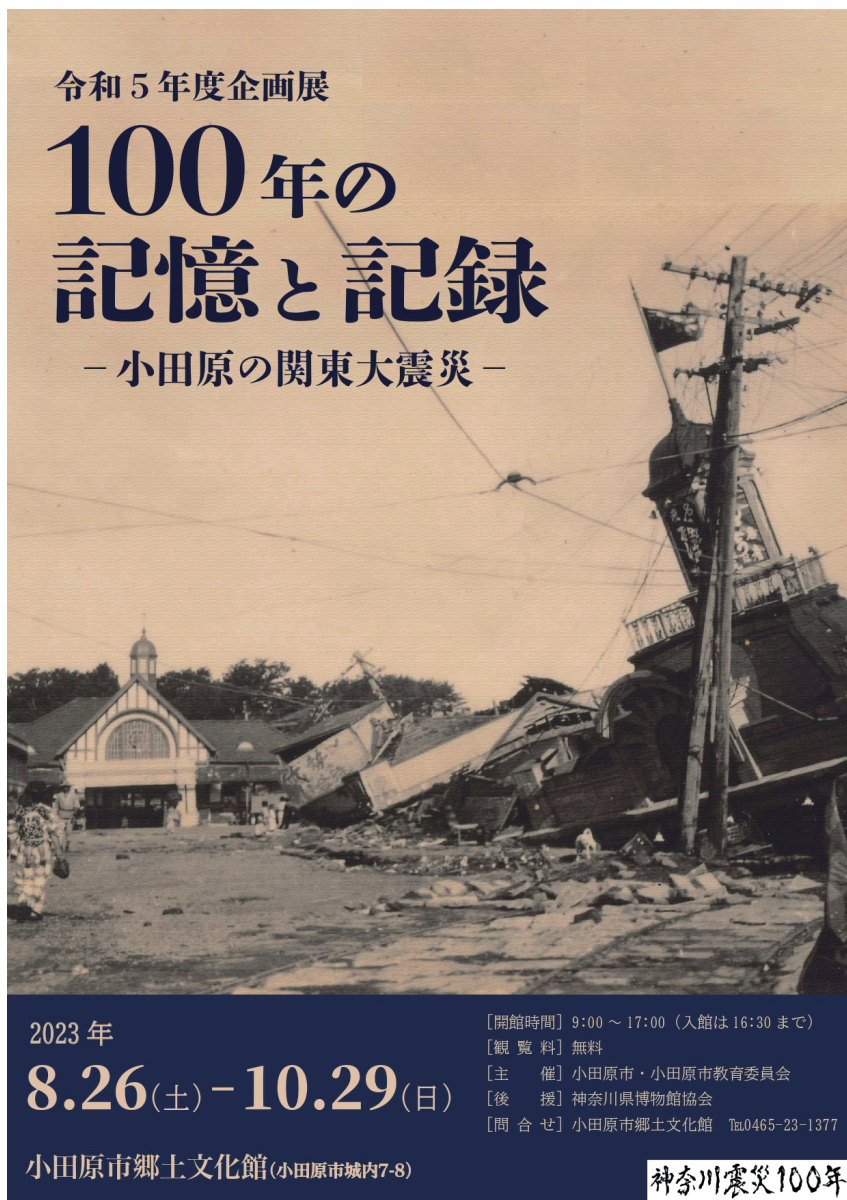


写真 1 企画展ポスター

り』への寄稿の機会をいただいたので、今回の企画展や関係資料について紹介したいと思います（写真 1）。

2. 小田原における地震被害

小田原は、酒匂川が形成した足柄平野を中心に市域が広がっています。この沖積低地は約 1 万年前以降

という比較的新しい年代に形成された軟弱な地盤であることから、関東大震災では足柄平野の広い範囲で震度 6 以上を観測しました（図 1）。一部の地域では震度 7 の揺れであったと推定され、建物の倒壊や火災、土砂災害を中心に大きな被害が発生しました。1927（昭和 2）年に神

奈川県が発行した『神奈川県震災誌』によると、足柄下郡（震災時は市制施行前であったため、現在の小田原市域は足柄下郡小田原町を中心とした1町13村の範囲にあたります）の死者・行方不明者は1,683人、半壊以上の被害を受けた家屋は総戸数16,252戸に対して14,853戸と報告され、被災率は91%という驚異の数字となっています。この被災率は県内でも群を抜いて高く、9月5日に神奈川県知事安河内麻吉から内相後藤新平に宛てた文書のなかで、足柄下郡の被害は「最モ甚大ニシテ各町村」にわたり、特に小田原町（市内本町、南町、栄町、浜町、城内ほか）の被害は「最モ莫大」で、ほとんど「全滅ノ状態」であったと報告されています（小田原市、2001）。

当時の町の中心部であった小田原町では本震と余震で多くの建物が倒壊し、その後、町の13か所から火の手があがりました。火は刻々と変わる風向きにより町から町へ燃え広がり、烈風による竜巻も発生しました。東海道（国道1号）の下を暗渠となって流れていた小田原用水は防火用水の役割も果たしていましたが、地震によって崩れたため消火に使うことができず、火は延々14時間も燃え続けました。翌日の午前2時ようやく鎮火した時には、町の3分の2が焦土と化していました。（図2）

犠牲者についてみると、小田原町では建物の倒壊や火災により多くの方が亡くなりました。このうちの一人が閑院宮別邸（市内城山）に滞在中であった閑院宮寛子女王で、倒壊した建物の下敷きになり亡くなりました。十字町（市内南町）にあった足柄病院は小田原きっての大病院でしたが、建物の倒壊と火災で医師・看護婦・患者など33人が圧死・焼

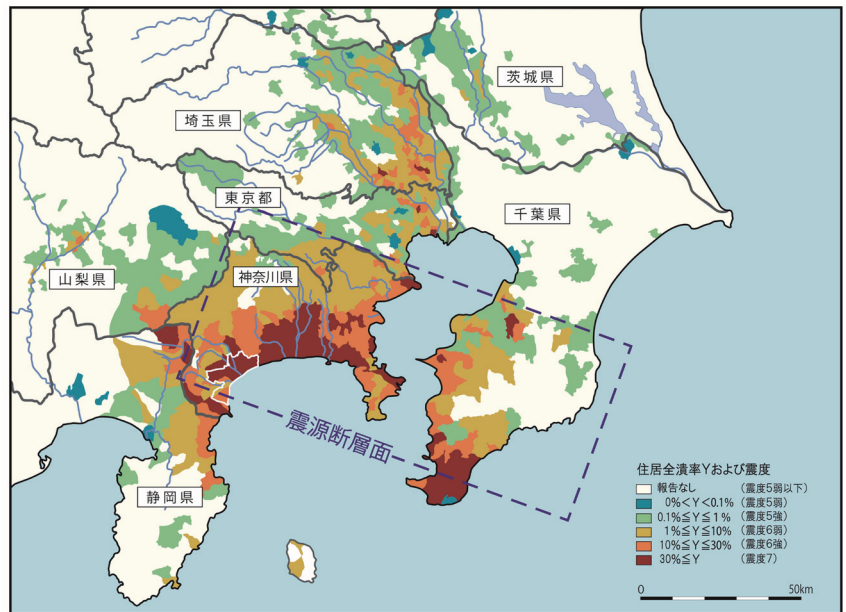


図1 関東大震災 震度分布図（武村雅之 2003 をもとに作成）

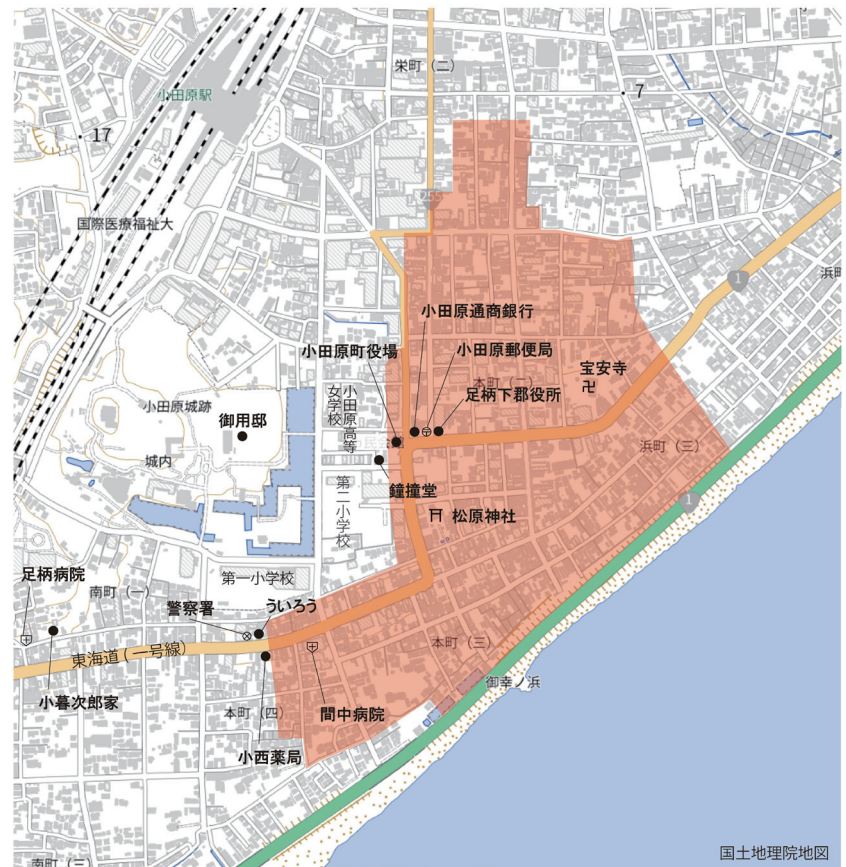


図2 火災により焼失した範囲（国土地理院地図に加筆）

死しました。

近隣に目を向けると、足柄村井細田（市内扇町）では小田原紡績株式会社の煉瓦造りの工場が地震により一瞬で倒壊、10代から20代の女

子を中心に134人もの従業員が圧死し、重傷者も200人にのぼりました。さらに片浦村根府川（市内根府川）では、根府川駅、白糸川流域、寒ノ目山トンネル出口の3か所が土



写真2 橋桁が落下した酒匂橋（小田原市立中央図書館蔵）

砂災害に巻き込まれ、400人以上が犠牲になりました。

この年の7月に完成し「耐久100年」と謳われた鉄筋コンクリート製の酒匂橋は完成からわずか40日で崩壊し、1920（大正9）年に架けられた鋼鉄製の酒匂鉄橋も、橋桁のひとつが酒匂川に倒れるように落下するなど、地震の大きさを物語っています（写真2）。

熱海線の国府津駅から小田原駅に至る線路や東海道線下曽我駅近辺の線路は、築堤が崩れて列車が転覆しました。町のシンボルであった小田原城址も天守台跡や石垣が崩れ、御用邸の建物もすべて倒壊しました。

学校の被害も大きく、多くの校舎が倒壊したり火災で焼失しました。理科室にあった化学薬品が火災の原因となった学校もあります。このほか、道路の亀裂や陥没、駅舎やホームの倒壊、鉄橋やトンネルの崩落、小田原城址や酒匂川流域の液状化など、ここに挙げたのは被害の一部にすぎませんが、小田原は各所で大きな被害を受けました（小田原市、2001）。

このような被害の状況は、さまざまな形で記録され残されてきたからこそ、100年後の我々もその内容を詳細に知ることができます。記録方法は、内務省による『大正震災志』

や各県や市が刊行した震災誌などの公的な記録のほか、日記や手紙などの私文書、写真、絵画、伝承碑、体験談など多岐にわたり、それぞれに重要な情報が詰まっています。特に写真については、この時代にはすでに一部の人々の間でカメラが普及しており、報道関係や官庁の写真技師や、街の写真館など職業としての写真師のほか、アマチュアカメラマンが撮影した写真も多く残っています。そこで、今回の展示では地震の被害写真をできるだけ多く紹介しました。

3. 企画展『100年の記憶と記録—小田原の関東大震災—』

小田原市郷土文化館では、震災から90年目の2013（平成25）年に『震災はどのように伝えられたのか』と題した特別展を開催し、テレビもラジオもインターネットもない時代に関東大震災がどのように伝えられたかを、写真や絵葉書、木版画などの資料から紹介しました。

今回の企画展は震災から100年という節目の年にあたることから、震災から現在までの100年の間に様々な形で残され伝えられてきた関東大震災の小田原における被害を紹介しました（写真3）。

展示は、「第1章 大正関東地震の発生」「第2章 100年の記憶と記録」



写真3 企画展入口（右）と展示風景（左）

「第3章 震災からの復興」「第4章 震災を伝える伝承碑」「第5章 いつか来る地震に備えて」の5章構成としました。「第1章 大正関東地震の発生」では、展示の導入として小田原における過去の大地震をパネルで紹介し、江戸時代の瓦版や災害番付などを展示しました。小田原で記録に残る最も古い地震は818（弘仁9）年に発生した弘仁の大地震で、892（寛平4）年に編纂された類聚国史には「相模・武蔵等大地震、圧死者無数」という記録が残っています。その後も小田原に影響を与えた大地震は関東大震災までに13回起きており、特に江戸時代の後半には約70年の間隔で大地震が発生しています。これらの地震により小田原城や城下町はたびたび大きな被害を受けてきました。

そして、1923（大正12）年9月1日に発生した関東大震災について、東京帝国大学地震学教室に設置されていた地震計が観測した地震記録や足柄下郡の被害者数、道路や線路沿いの被害を地図に書き込んだ『震災地応急測図原図』などを用いて足柄下郡の被害状況を概観しました。

「第2章 100年の記憶と記録」は、震災直後に撮影された写真のほか、震災から数年後、数十年後に残された絵画や体験談、発掘調査によって見つかった地震の痕跡や遺物など、様々な資料を通じて小田原の被害状況を紹介しました。写真については1897（明治30）年から現在まで市内本町で営業を続けている五十嵐写真館が撮影したガラス乾板写真を中心としました。このほか横浜開港資料館より借用した鉄道関係の被害及び復旧状況を詳細に撮影した写真や、個人が撮影した写真なども展示しました。これらの写真からは、例えば東海道沿いでは、瓦葺き2階建

ての重厚な建物だった濟世堂薬局小西本店や八棟造りのういろうが倒壊した様子や、山角町から筋違橋（市内南町）では東海道沿いの家や電柱が傾き、東海道の下を暗渠となって流れていた小田原用水が崩れている状況などが見て取れます。また東海道を挟んで北側の家の方が南側の家よりも倒壊の度合が大きく、電柱も海側に傾いていますが、これは東海道の南側と北側とで地盤の堅固さに違いがあるためと考えられます（写真4、5）。

絵画資料では、小田原出身の画家である小暮次郎が描いた震災画を紹介しました。小暮氏は16歳の時に十字町（市内南町）で被災しました。震災画について筆を執ったのは、地震から60年近く経過した昭和50年代頃のことですが、まるで昨日の出来事であるかのように鮮明に描かれており、小暮氏にとって震災がいかに衝撃的なものであったかが伝わります（写真6）。



写真4 瓦の重みで崩れた濟世堂薬局小西本店（小田原市立中央図書館蔵）



写真5 東海道沿いの被害 山角町から東を写す（小田原市郷土文化館蔵）

小田原の中でもひとときわ被害の大きかった根府川地区の土砂災害は、根府川駅の地すべり、白糸川流域の山津波、寒ノ目山トンネルの土砂崩れという3か所で起こった土砂災害の総称です。展示では、熱海線根府川駅～真鶴駅間で発生した土砂崩れや線路の埋没、トンネルの崩壊などの被害とその復旧過程を記録した写真を横浜開港資料館から、また復旧工事の関係者の家に残されていた写真を個人の方からお借りし、土砂災

害の被害や復旧の過程を紹介しました。

「第3章 震災からの復興」では、町全体の復興のほか、震災後に発生した火災で焼け落ちた松原神社や江嶋屋の復興の過程などについて紹介し（写真7）、「第4章 震災を伝える伝承碑」では、市内に点在する関東大震災に関する自然災害伝承碑を地図とパネルで紹介しました。伝承碑には震災で亡くなった人々を悼む慰霊碑や寺社の復興碑、震災で壊れ

た農道や灌漑用水路などの復旧完了を伝える記念碑などがあり、生き残った家族や地域の住民などによって建てられました。土砂災害で多くの方が犠牲になった根府川周辺には、他の地域に比べて多くの石碑が残っており、被害の大きさを感じさせます。

「第5章 いつか来る地震に備えて」では、神奈川県温泉地学研究所から速度型地震計（水平動）を借用し展示しました。振動を与えると磁石の間でコイルが動いて揺れを検知するという構造がわかるように展示し、実際に床に振動を与えてコイルが動く様子を紹介しました。また、温泉地学研究所の地震研究の活動紹介、防災について啓発するパネルやハザードマップなども併せて展示しました（写真8）。

8月26日～10月29日までの65日間の会期を通して、4,921人の方々に来場いただき、アンケートでは「地元である小田原の被害の様子がわかった」「たくさんの被災者がカメラで写真を残しているのを知った」「写真、実物、絵、文章、それぞれに異なる表情で迫ってきて、興味深く見ることができた」といった声が印象的でした。小田原の被害について地元の方もあまり知らなかったことがわかったとともに、多くの人に小田原が受けた被害の大きさを紹介できたのではないかと思います。

4. 関連イベント「郷土研究講座」「郷土探究会」の開催

企画展の関連イベントとして、2023（令和5）年9月23日に郷土研究講座「関東地震100年 その地震像と被害について」及び郷土探究会「関東大震災の伝承碑をめぐる－根府川地区の山津波－」を開催しました。郷土研究講座の講師は神奈



写真6 火事で焼失した新築中の小田原通商銀行（小田原市郷土文化館蔵）



写真7 焼失した松原神社（小田原市立中央図書館蔵）

川県温泉地学研究所の主任研究員である本多亮氏に、郷土探究会の案内は神奈川県立生命の星・地球博物館学芸員の山下浩之氏と、おおい自然園園長の一寸木肇氏にお願いしました。

郷土研究講座では、関東大震災を引き起こした地震である関東地震について、地震学の立場からお話しいただきました。様々な観測データや資料を示していただきながら、関東地震の発生のメカニズムや地震の特徴、また地震の予測などについても言及されていました。本多氏によると、関東地震は過去の同規模の地震と比べて大きな余震が多く、2日間でマグニチュード7級の余震が5回、マグニチュード6級の余震は16回も起きていたとのこと。最初の本震に耐えても、2回目、3回目の余震で倒壊した建物も多かったと考えられます。また、過去に発生した地震の研究の蓄積が、将来の地震予測に繋がることを改めて感じ、大変勉強になる講座でした（写真9）。

郷土探究会は、根府川地区に残る震災関係の史跡をめぐるという内容で、根府川駅からスタートしました。最初に根府川駅上方で発生した地すべりの犠牲者を追悼した石碑を見学し、その後、地すべりが発生した場所へ向かいました。現在は建物で見えづらくなっていますが、山が大きくえぐれている様子を下から確認し、続いて地すべりの発生場所へ移動して駅の方を見下ろしました（写真10）。説明を受けて初めて周辺との地形の違いに気付くとともに、地すべりの規模の大きさにも驚きました。その後、寺山神社の耕地復旧記念碑や岩泉寺の歿死者供養塔、白糸川沿いの震災石などを見学し、最後に釈迦堂へ向かいました。

釈迦堂は白糸川の河口付近の右岸にあり、岩盤には釈迦如来像が刻ま

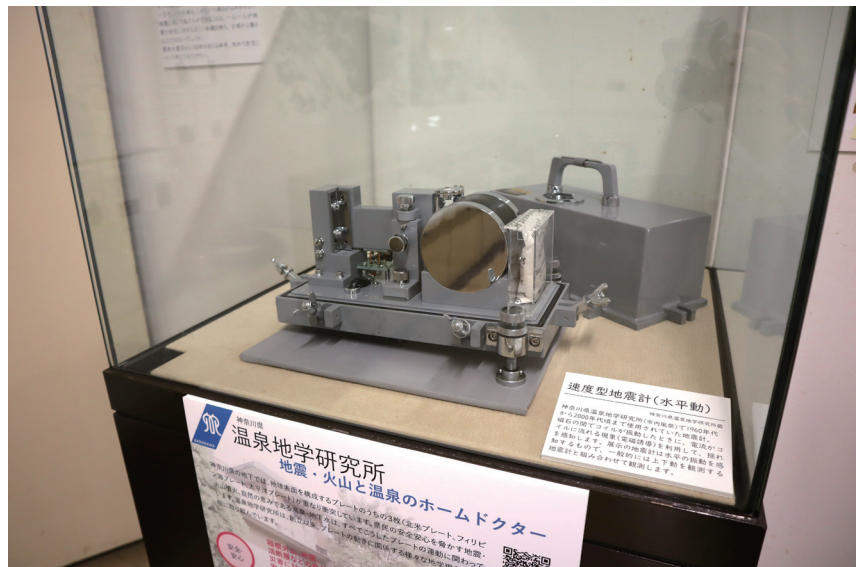


写真8 速度型地震計（水平動）（神奈川県温泉地学研究所蔵、筆者撮影）



写真9 本多亮氏による郷土研究講座



写真10 郷土探究会の様子：地すべりの場所から駅を見る参加者



写真 11 郷土探究会の様子：現在の釈迦如来像を見る参加者



写真 12 尾崎道太郎氏の肖像（左上）と山津波に飲み込まれた機関車（小田原市郷土文化館蔵）

れています。この釈迦如来像は、震災前は目線よりも上の位置にありましたが、白糸川の山津波に飲み込まれて土砂に埋もれたため、現在は釈迦堂の階段を下りた洞窟の中に安置されています。この山津波は白糸川の上流にある大洞山の大規模な崩壊によって発生したもので、時速 50 km 近い速さで流れ下り、根府川地区の多くの民家や人々を一瞬で飲み込みました。埋没した家は約 65 戸、

このうち一家全滅した家は約 15 戸と言われ、230 余名が亡くなりました。堆積した土砂を取り除くことは不可能で、「長え（とこしえ）に発掘の見込みなく」という状況だったようです（小田原市、2001）。その状況は、釈迦如来像の位置（高さ）が地震の前後で大きく変わったことからみることができ、堆積した土砂を取り除くのではなく、土砂の上に新たに道路や集落を作ったことが

分かります。（写真 11）。

今回の関連イベントでは、地震学の話聞いた後で、実際に現地に立ち、地学の話や被害の状況、当時のエピソードなどを見聞しました。参加者の方々は改めて関東大震災がもたらした被害の大きさや地震の怖さを感じたのではないのでしょうか。

5. 根府川の土砂災害に関する資料の紹介

次に企画展の展示資料の中から根府川の土砂災害に関する写真を 2 点紹介します。

1 点目は、寒ノ目山トンネルの出口で土砂に埋没し犠牲になった熱海線の機関士に関する資料です（写真 12）。この資料は、企画展が始まって 1 週間後の 9 月 2 日に小田原市郷土文化館に寄贈されました。奇しくも震災からちょうど 100 年。不思議な運命を感じたとともに、驚いたのは資料の内容でした。寒ノ目山トンネル出口の土砂災害とは、熱海線の真鶴駅を発車し根府川駅へ向かっていた上り 116 列車が、寒ノ目山トンネルを通過中に関東大震災に遭い、先頭の機関車が白糸川を流下した山津波に巻き込まれた事故です（井上、2013）。この事故で機関車に乗務していた機関士と火夫が土砂に埋もれて亡くなりましたが、客車はトンネル内にあったため乗客は無事でした。トンネルの手前で列車が土砂に埋もれている写真は、小田原の関東大震災の被害を伝える写真の中でも有名な一枚ですが、犠牲になった機関士については、長年、それこそ 100 年間知られていませんでした。それが、今回寄贈された資料によって明らかになったのです。

写真の左上に写る男性が、亡くなった機関士の尾崎道太郎氏です。1896（明治 29）年足柄上郡湯触村（現足柄上郡山北町）に生まれ、山

北機関庫の機関手見習を経て、国府津機関庫所属の機関士として乗務中に関東大震災に遭い、土砂崩れに巻き込まれて命を落としました。享年28歳、寄贈資料の中には書きかけの婚姻届もあり、結婚間近であったこともわかりました。

また、寄贈された資料にあった鉄道省からの追悼文には、震災時の尾崎氏の行動が書かれていました。それによると、尾崎氏は地震に気付いて列車を急停車させたのち、後退させていたことがわかりました。尾崎氏は急停車後に周囲の様子をうかがった際、進行方向にある根府川駅で列車が地すべりに巻き込まれるのを見たのではないのでしょうか。そして、この場所でも同様の事が起こるのではないかと予見して、列車をトンネル内へ避難させることを考えたのではないのでしょうか。後退させた理由はそのように考えることができます。しかし、客車がトンネル内に入り、あと少しで機関車も収まるところで、機関車は山津波（白糸川沿いを流下し根府川地区の集落を襲った山津波と考えられます）に巻き込まれてしまったと思われる。尾崎氏と火夫の二人の命は失われましたが、寄贈された資料は亡くなった機関士の人物像や、彼の判断によって多くの乗客の命が救われたことを後世に伝える貴重な資料です。

2点目は、熱海線根府川駅～真鶴駅間の復旧工事の関係者の家に伝わるアルバムの中の一枚です。一番右に写る男性が関係者で、1928（昭和3）年の『大日本商工録』に、根府川地区の「土木建築工事設計請負」として名前が記載されています。熱海線の復旧工事は国府津改良事務所が担っていましたが、地元の職人も携わっていたことが分かります。注目したいのは写真の背景に写ってい

る大きく削られた山で、この場所こそが、根府川駅で列車を巻き込み、130名を超える人々の命を奪った地すべりが発生した場所なのです（写真13）。根府川駅の上方、直線距離で約160mの位置にあり、先ほども述べましたが現在でも山が大きくえぐれている様子を確認することができます。この地すべりは、何層にも重なる火山灰層の間に地下水が入り込み滑りやすくなっていたところに、地震が引き金となって上部

の層が山肌からはぎ取られたために起こったと考えられています。（釜井、1991）その結果、大量の土砂が根府川駅の列車や駅舎、ホームで列車を待っていた人々などを巻き込んで崖下の相模湾に流下しました（写真14）。

この地すべりにより根府川駅周辺の地形は大きく変わりました。現在、根府川駅を挟んで、海側を国道135号、山側を旧道（県道740号）が走っていますが、地すべりによっ



写真13 復旧工事関係者と根府川駅上方の地すべりの跡（個人蔵）



写真14 根府川駅の崖下に落下した列車（小田原市郷土文化館蔵）

て断崖絶壁だった根府川駅の崖下の海岸に幅 200 m にわたり沖に向かって 100m の磯浜が形成されました(図 3)。国道 135 号はこの時に形成された場所を走っています。また旧道が線路の下をくぐって根府川駅の山側を走っているのは、震災前の根府川駅が崖のすぐ上にあった名残です。根府川駅の復旧にあたっては、あまりにも土砂の堆積量が多かったため、駅を別の場所に移す案も出されました。しかし、地盤そのものは堅固であったため、岩石や土砂を除去して復旧することとなりました。この時に除去された土量は 5,000 立坪(1 立坪は 1.8m³)とも言われており、根府川駅～真鶴駅間の復旧は関東大震災の鉄道復旧の中で最も時間がかかりました(中央防災会議、2016)。そのような大きな被害を受けた土砂災害ですが、現在その痕跡を残すものはほとんどありません。そのため、地すべりの痕跡をはっきりと残す根府川駅上方の地形は、震災の被害を伝える重要な場所です。

これら 2 点の資料は、これまで知られてきた関東大震災の記録に、写真という視覚的な要素によって情報を補完する重要な資料といえるでしょう。

6. おわりに

企画展の会期中、ギャラリートークや学校の課外授業など、展示の解説をする機会が何度ありました。そのたびに、解説の最後を防災の話で締めくくり、日頃から防災について考えることの大切さを伝えてきました。企画展が終わり一段落ついて迎えた 2024(令和 6)年 1 月 1 日、午後 4 時 10 分に能登半島地震が起きました。マグニチュード 7.6、石川県輪島市では震度 7 を観測し、周辺の地域でも震度 6 という大きな揺れが記録されました。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

「震災は忘れたころより来たる」。これは明治から大正にかけて活躍した文学者で物理学者でもあった寺田寅彦が演説で述べた言葉と伝えられ

ます。寺田の言葉のとおり、地震は忘れた頃にやってきます。そして地震の発生そのものを防ぐことはできません。そのような地震大国である日本に暮らす私たちができること、それは地震による被害を防ぎ・減らす「防災」「減災」という考えのもと、例えば家具の固定や防災用品の備蓄、避難場所の確認や地震の際の行動の見直しなど、一人一人が防災について正しい知識を持ち行動に移すことだと思います。そして有事の際に落ち着いて行動するため、日ごろから意識しておくことが大切です。

関東大震災は 100 年も前に起きた地震ということもあり、現代の私たちがそこから直接学ぶことは少ないかもしれません。しかし、当時の被害状況やその時の行動を振り返ることで、同じ過ちを繰り返さないことはできるでしょう。地震の発生を常に想定しながら暮らすことは難しいと思いますが、今からできる防災について改めて見直していただき、“その時”に備えてもらえれば幸いです。

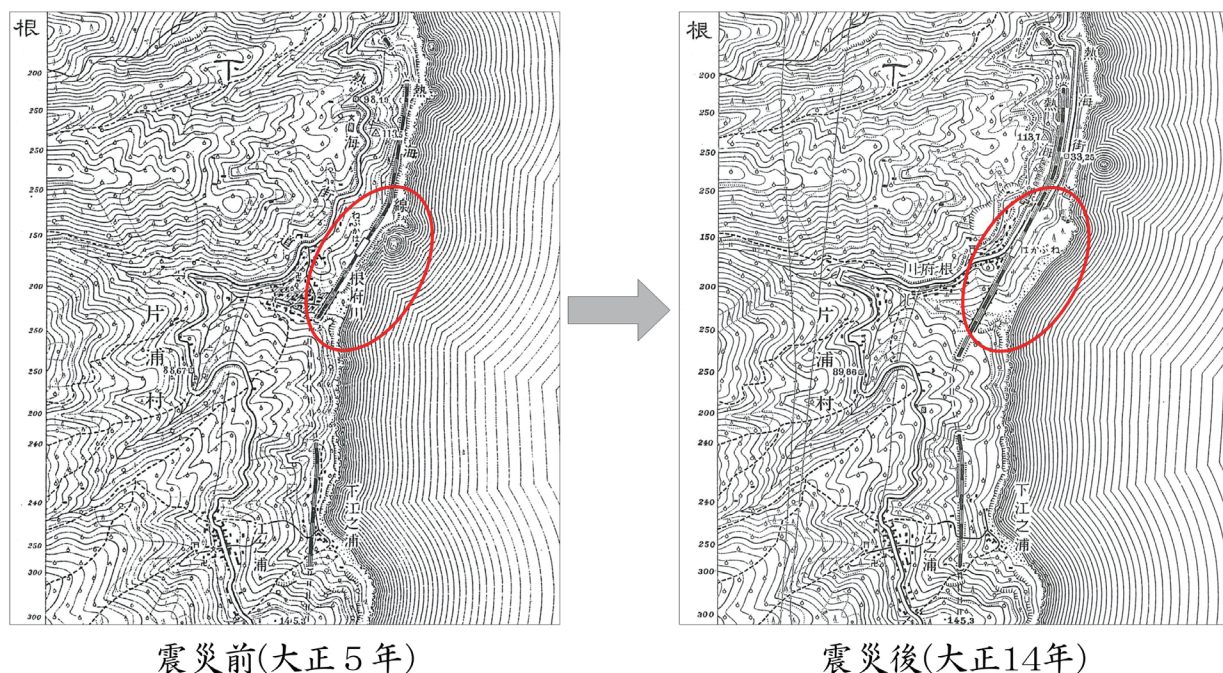


図 3 土砂崩れによって磯浜が出現した根府川駅直下(国立国会図書館蔵地図に加筆)

参考文献

井上公夫 2013『関東大震災と土砂災害』古今書院
小田原市 2001『小田原市史』通史編 近現代、小田原市
神奈川県 1927『神奈川県震災誌』神奈川県

釜井俊孝 1991「squeeze 型地すべりの発生機構— 1923 年根府川駅地すべり—」『地すべり』第 27 巻第 4 号、日本地すべり学会
武村雅之 2003『関東大震災 大東京圏の揺れを知る』鹿島出版会

中央防災会議 2006『一九二三 関東大震災報告書 第一編』中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会
鉄道省 1927『鉄道震害調査書 大正十二年』鉄道省大臣官房研究所